



タンチョウ博士のお話（第24回）

○ヒナがかえ孵った、大きく育った、さあ、大空へ！

千歳川の洪水対策として、長沼町では支流のけぬふち嶮淵川に、面積約 200ha の嶮淵右岸地区遊水地が造られることになりました。が、もともとこの地域は舞鶴と呼ばれていたため、遊水地もその名に変えられ、この改名は、まさに「名はたい体を表す」ことになりました。

舞鶴遊水地のあたりは、かつて大きな「マオイ沼」があり、西の「オサツ沼」を含めた湿原は、タンチョウを含むツルの一大生息地でした。しかし、ヒトが沼を埋め、湿原を干拓したため、100 年以上も前にツルは姿を消しました。つまり、ツルは昔話の中むかしばなしでしか生きていなかったのです。

1964（昭和 39）年 9 月に、私が釧路へ赴任してツルの調査を始めたころは、せいぜい 200 羽ほどが道東の片隅で暮らしていました。ですから、タンチョウがかつてのホームグラウンドの道央へ戻ってくるとは、想像もしませんでした。そう言えば、その年の 10 月に東京オリンピックの開催で、日本中がわきたっていました。そして今、56 年の歳月を経て、再度の東京オリンピックが開かれる（はずだった！）年に、道央圏でタンチョウの初の繁殖生活を観察できるめぐりあわせに、言い知れぬ想いを感じています。

遊水地で、今、1 羽のヒナが順調に育っています（図 1）。卵から孵ったヒナの姿は、首が少し長めの、二ワトリの“ひよこ”を想像してください。数日して巣を出ると、湿地を走り回るため、まず足が伸びるので、ひと月過ぎた頃の姿は、小さなダチョウを連想させます。「焼け野のきぎす雉、夜の鶴」の喩えのように、生後 50 日ほど、ヒナは主に母親の羽の下で、添い寝をしてもらい夜を過ごします。

やがて体も白い羽に生え変わり、翼の羽が伸び、生まれて 100 日ほどで飛ぶようになります。ここでやっと本来の空飛ぶ“鳥”になるので、この状態を「書初め」かきぞに倣い「飛初め」と呼んでおきます。遊水地では 5 月 24 日にふか孵化を確認していますので、この広報がお手元に届くのは、飛初めからひと月後です。すでに 9 月初旬に、家族そろって遊水地の外へ飛ぶのも確認されました。

「這えば立て、立てば歩めの親心」になぞらえて、今は「歩めば走れ、走らば飛べよの親心」とでも言いましょうか。ともかく、飛ぶには練習が必要ですし、最初のうちは、まっすぐ、低く、短い距離しか飛べません。しかし、飛べるようになって安心とは言えません。

なぜなら、1 歳未満の幼鳥が飛んで電線衝突などの事故で亡くなる割合は、成鳥のそれよりずっと高いの

です。勝手に走り出した幼児の後を、心配そうについて行くヒトの親の姿に、幼鳥の羽ばたきに気付き、急いで追いかけて始めた親鳥のふるま振舞いが重なる気がします。ヒトとツルが共に生きていくために、これからも遠くから家族をそっと見守って欲しいと願っています。（文：正富宏之）



図 1. 飛ぶ練習。幼鳥(右)が羽ばたいて跳び上がったので、飛んで追いかけてようと翼を広げた親(左)。
(写真：正富宏之)